

小さな群れ

カトリック美唄教会
2022年12月 No.307
2022年11月27日発行

Fr.Narciso Cavazzola ofm

11月も末になり27日から待降節という期間に入ります。

待降節とは「キリストの降誕を待ち望む期間」という意味で、救い主イエスの誕生を心待ちにしながら準備をする4週間になります。この時期、欧米の家庭では木の葉で飾った丸いリースに4本のローソクを立て、日曜日が来るたびに1本ずつ火をともしていきます。4本のローソクすべてに火がともるとクリスマスになるというわけです。



イエス・キリストの誕生はよく光にたとえられます。旧約聖書の言葉に、「暗闇の中を歩む民は大なる光を見た。死の陰の谷に住む者の上に、光が輝いた。」（イザヤ書9：1）と言う記述があります。これを受けて新約聖書のルカ福音書にも同じような記述があります。“キリストは闇を照らす光”、つまり救い主でありその誕生を心待ちにする、その象徴としてローソクを立てるのです。

待降節の時期には4本のローソクと並んで馬小屋も準備されます。

これは今から799年前、イタリアの小さな山村グレッチョ村（ローマとアッシジの間にある山村）で、アッシジの聖フランチェスコが始めました。

1223年の12月の初め、今年のクリスマスをどのように迎えようか、また山村に住む人々が、神にどれほど愛されているかを知らせるには、どうしたらよいただろうかとフランチェスコは考えていました。

1200年以上前に、ユダヤのベツレヘムという町で、人間の泊まる宿屋ではなく、牛やロ



バを夜につないでおく洞窟で、イエスさまはお生まれになったのです。この「貧しさ」の中でこの世に来れたキリストを、フランチェスコは再現したいと考えました。

主任司祭 ナルチゾ神父

2022年12月 主日ミサ・平日のミサ 予定

美唄教会 小さな群れ
2022年12月 No.307
2022年11月27日発行

12月 クリスマスの喜びと祝福

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時間		
2	金		午前10:30	ミサ後 聖書に親しむ	
4	日	待降節第2主日	午前11:00		宣教地召命促進の日献金
9	金		午前10:30	ミサ後聖書に親しむ	
11	日	待降節第3主日	午前11:00		ミサ後運営委員会
16	金		午前10:30	ミサ後聖書に親しむ	
18	日	待降節第4主日	午前11:00		
23	金		午前10:30	ミサ後聖書に親しむ	
24	土	降誕前夜祭	美唄教会ではミサなし		砂川教会にて午後7時
25	日	主の降誕	午前11:00		
30	金		午前10:30	ミサ後聖書に親しむ	
1/1	土	神の母聖マリア	午前11:00		

《 平日のミサ 》 金曜日のみ 午前10:30 2・9・16・23・30日です
《 聖書を親しむ 》 平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日（敬省略）	清掃当番	花当番
13日 ルチア 葛西道子、山内亜古	第2週 板垣 小川（ま）	船 野
15日 クリスチアナ 菅野美月	第4週 中村	

【お知らせ】

- ◎12月～3月までの第3水曜日のロザリオの祈りはお休みになります。
- ◎宣教地召命促進の日は特別献金です。
- ◎12/25（日）佐藤レミリアちゃん初聖体を受けます。
- ◎1月1日 神の母聖マリア祭日（日）11時よりミサ

父母の開拓

ヨゼフ 吉村道雄

満州引き上げ

昭和20年9月、終戦のどさくさのなか、中国軍に追われ、ロシア軍に追われながら満蒙開拓団の居留地から吉林という町に向かっての逃避行が始まった。関東軍は疾うに撤退し、指揮官も無く、残ったのは農民と女子供であった寒さと飢えの中、我が子の一人は亡くなり、もう一人は中国人に託した。道すがらの街々で食物を請い、衣服を請い、母親は赤ん坊の乳を飲ませてくれる女性を探し、中には我が身を中国人に託す女性もいたという。日本に反感を持っている中国人の中での逃避行である。まして、冬も迫ると寒さが身に沁みだした。

ようやく辿り着いた吉林では、映画館の跡に立錐の余地も無いほどに詰め込まれた。朝になってみると、死んだ子を負ぶさったままの母親がおり、床には寝たままの死体が幾つも転がっていた。汚物が垂れ流され、そのまま凍っていた。その臭いは想像を絶していた。声を出して泣く気力も失せていた。朝になると食物を求めて町の中にふらふらと迷い出るのであった。こんな状態が次の年引き上げ船が出るまで続いたのである。

引き上げ船の計画がまとまり、汽車でコロ島まで行き、やっと船上の人とり。おせるような暑さの船倉に体を横たえた。父母は二人きりとなって佐世保に上陸した。昭和21年の盛夏となっていた。中国の開拓に入ってから亡くなった子は、先妻の子4人も含めて8人に上る。

母はよく言っていた「本当に生きて帰れるとは思わなかったなあ。でもほとんどの中国人は優しくしたさ。自分たちの生活もたいして楽じゃないのに、コウリャンとか豆とか豆腐とか色々恵んでくれたもんだ。でも、あのコウリャンのおかゆだけはまずかったなあ。あの中国人に頼んだ子、どうしたかなあ。」

「中国人に、あんただけなら面倒をみてやるが旦那がいるんじゃないかとよく言われたもんだ」とも。

後日、昭和30年頃には中国における残留孤児の調査が何回もあり、書類が随分送られてきていた。役所の方が直接話しを聞きに来たりもした。

帰国後は、一旦父の故郷である山梨県に留まり、母は病院に入って体力の回復を待ちながら年を越した。

明けて春、北海道の開拓へと向かうのである。